

令和5年度 青梅市立今井小学校 自己評価シート(報告書)

自己評価集計

教育目標	1 思いやりのある子 2 自ら学び考える子 3 心身ともに健康な子	目指す子供像	1 たくまさと優しさを持ち、誰かのために行動できる子供 2 学習を自ら計画し、振り返り、仲間と共に高め合うことができる子供 3 健康的な生活習慣を獲得するとともに、困ったときに誰かに相談できる子供	目指す教師像	1 授業力や専門性を向上させようと思意あふれる教師 2 子供一人一人に寄り添い、優しさと厳しさを併せもつ教師 3 自身のライフワークバランスを考慮し、やりがいをもって働く教師
------	---	--------	--	--------	---

中・長期目標	1【豊かな心】人権尊重教育の推進。いじめの防止。集団の中での活動を通して他者の気持ちを想像し行動できる子供の育成 2【学力向上】単元を通して子供が身に付ける資質・能力を明らかにした学習展開。ICT活用による個別最適化と協働的な学習の推進。子供が自ら計画して実行する家庭学習。 3【心身の健康】日常的に運動に親しむ態度の育成。教育相談機能の向上と子供がいつでも相談できる環境の整備。より良いメディアとの関わり方を考えることのできる児童の育成 4【家庭・地域との連携・協力】充実した広報活動と開かれた学校づくり。地域・保護者との協働的な学習。「霞川学習」の推進 5【教師の働き方の改革】児童とかかわる時間、授業準備の時間を確保し、教育の質の向上のための働き方改革の推進。	達成度	4 ほぼ達成 A 85%以上 3 おおむね達成 B 70%以上 2 変化の兆し C 60%以上 1 不十分 D 60%未満
--------	---	-----	--

項目	重点項目	昨年度までの現状と課題	目標	番号	重点評価項目	達成度		最終評価	評価方法	考察及び次年度への課題と改善策
						自己	関係者			
豊かな心の育成	挨拶の励行	児童のアンケート結果では、92%の児童が挨拶について肯定的な評価を示している。一方、代表委員会が年2回実施した「あいさつ運動」では、児童同士の挨拶が不十分であるという結果が見られた。また、保護者のアンケートから、児童が地域で挨拶をする機会が減っている傾向が見られた地域の方々や児童間で挨拶が推進できる取組を進める。	取組目標	1A	すすんで挨拶ができるように指導を重ね、児童の主体的な取り組みの計画を立て実践する。職員が率先垂範する。	3.3	3.7	B	教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	児童がすすんで挨拶ができるように指導をした。児童のアンケート結果では、昨年度同様92%の児童が挨拶について肯定的な評価を示している。一方、教職員のアンケートでは「挨拶の指導をしているが、なかなか児童に定着しない」という結果になっている。引き続き、校長自らが毎朝正門に立ち、児童に指導するだけでなく、各学期に1回は挨拶にかかわる話を校長が朝会時に行う。地域の方々から「今井小は挨拶が良くできる」という声もいただいているので、良いことも児童に伝え賞賛することで、すすんで挨拶ができる児童を育成していく。
			成果目標	1B	児童が場や状況に合わせて、すすんで挨拶をしている。	2.9				
	いじめの防止	いじめ調査を年間4回児童に実施した。保護者・児童から訴えたがなかったものは教育委員会に即時報告し、組織的に対応した児童のアンケートから3%弱の児童が家庭や教員に相談ができなかったという結果が出ている。訴えがあった児童への継続的な見守りとスクールカウンセラーを活用した相談体制の充実を行うことで、いじめの未然防止に努める。	取組目標	2A	重大ないじめの未然防止のため、職員で協力組織として早期発見・早期対応に努める。全教育活動を通して人権意識を高める。	3.4	4	B	教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	児童のアンケート結果では、学校への取組の評価が99%、自身もいじめに関わっていないという回答が98%と高い数値となった。しかし、いじめに関しては評価値が100%を目指すことが大事である。今年度は、学校便りに掲載することでスクールカウンセラーを活用する保護者や児童が増え、いじめの早期発見および解決につなげることができた。いじめ対策委員会をはじめ、組織としていじめに対応できたことも成果として挙げられる。いじめゼロを目指しながらも、いじめが起きた場合には早期解決ができる組織づくりをすすめていく。
			成果目標	2B	児童が思いやりの気持ちを持ち、自他共に大切にしようとしている。	3.3				
非認知的能力を育む	なかよし班での縦割り活動を、新型コロナウイルスの感染拡大状況を踏まえて、内容を精選・工夫しながら計画通りに実施することができた。活動に対する自分自身の目標やめあてを設定し、終了後に振り返りという活動を通し、発達段階に応じた異学年集団での児童一人一人の更なる成長を目指す。	取組目標	3A	委員会、クラブ活動、なかよし班活動等において、児童が主体となって運営する活動を計画し支援する。	3	3.7	B	教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	年度途中から新型コロナウイルスが5類に移行したことで、様々な活動が再開した。特に、委員会活動、クラブ活動では、教師主導の活動にならないよう、6年生が中心となって活動をする機会を増やすことができた。児童の発案により、集会活動が行えたことも成果である。児童もたてわり班活動等の異学年交流を楽しみにしているが、取り組むことができる時数にも限りがあるので、短い時間の中でも充実した活動ができるよう、内容を精選していく。	
		成果目標	3B	児童が特別活動で自分の役割を意識したり、仲良く活動したりしている。	3.2					
学力向上	資質・能力を学習実	保護者、教師からは改善は見られるものの、基礎基本の定着はまだ不十分であるという回答も多くあった。中学校への学びの接続を意識し、必要な学習内容を定着させるための家庭学習を推進する。校内研究を通して単元で授業を作っていくという意識が教員の中で見られるようになってきた。	取組目標	4A	単元を通して身に付ける子供の資質・能力を明らかにして、週案に記載するなど意図的・計画的に指導と評価の一体化を図る。	3.1	3.1	B	教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	アンケート結果から、学習への基礎・基本的な力が身に付いていると肯定的な回答をしている児童は90%を超えるほど、自己肯定感が高い児童が多い。しかし、単元ごとのテスト結果や学力調査の結果から、基礎学力の定着が不十分だと感じている教員が多い。児童の非認知的能力を育成してきた成果ではあるが、8割以上の児童の学習成果が評価規準に達するよう、さらなる授業の改善が求められる。学ぶことが楽しいと感じている児童が多いことを生かし、基礎・基本的な学習内容を定着させる取組を、研究部を中心に進めていく。
			成果目標	4B	8割以上の子供が、評価規準に達し、単元の形成的評価において平均85%達成している。	2.2				
	ICTの活用	端末を学習用具として児童が使用し、学習したことを整理したり深めたりすることができるようにした。専科教室にも電子黒板を整備し、日常的にICT機器を活用した授業に取り組んでいる。アンケートでも、95%の児童がICT機器の使用に対して肯定的な回答を示している。しかし、学級によって活用状況に差が見られる。	取組目標	5A	ICTを活用した「伝え合う活動」「振り返り活動」を重視した授業改善に努め、主体的に学習に臨む態度を育てる。	2.4	3.5	B	教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	昨年度、ICTを学校で活用していると肯定的な回答が98%から、95%と若干の減少が見られた。1年生でも1学期末からChromebookを活用し始めている。2学期には、全学年デジタルドリルを導入し、活用している。来年度は、さらなる「伝え合う活動」「振り返り活動」の充実に向け、新しいICTコンテンツを導入する。年度当初にICTの研修を教員に行い、各学級でのICTの活用量に差が出ないようにしていく。
			成果目標	5B	週に3回以上はICT機器を学習用具として使い、自身の学習を整理したり、深めたりしている。	2.9				
	家庭学習習慣化	保護者、教職員のアンケートからは、まだ家庭学習への取組が不十分であるという回答が多い。目標をもって計画的に今自分に必要な学習をすることができる児童はまだ少ない。中学校への学習に向け、児童が自ら計画し、学ぶことができるよう、家庭学習を充実していく。	取組目標	6A	家庭学習頑張り週間、家庭学習の手引きの活用を促す等家庭学習の時間を確保できるように児童や家庭に啓発する。長期休業中などにICTを活用し家庭学習との連携を図る。	2.4	3.1	B	教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	アンケート結果から、家庭学習に取り組んでいると回答している児童は75%という低い結果であった。保護者の回答も、学校の取組に対する肯定的な評価は87%とやや他の回答を比べると低い数値となっている。原因として、家庭学習の定着ができていない児童が固定化していると回答している教員が多い。家庭学習の取組は、ドリル等を利用した復習に取り組ませるだけでなく、自ら内容を選び、計画して取り組む自主学習を推奨してきた。来年度は、各学年ごとに自主学習に取り組む目標の立て方を明示し、家庭学習への取り組み方の改善を図る。
			成果目標	6B	児童の家庭学習の取り組みが100%となり、家庭学習が習慣化している。児童が自己の課題をつかみ、その解決のために主体的に家庭学習に取り組んでいる。	2.3				
健康な身体	体育の充実	新体力テストは、長座体前屈の結果のみ都の平均値を上回った。それ以外の種目は、都の平均値を下回る結果である。女子は反復横跳び・握力が都の平均値より低い傾向にある。今年度は、3年ぶりにマラソン週間を実施することができた。コロナ禍で制限されていた運動の機会を増やし、児童の体力向上に努める。	取組目標	7A	体力向上のために体育の授業を工夫し、休み時間や放課後に運動に親しむ児童の育成を図る。	2.8	3.1	B	教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	新体力テストの結果から、男子は立ち幅跳び結果のみ都や全国の平均値を上回った。それ以外の種目は、平均値を下回る結果である。女子は反復横跳び・20mシャトルラン、ソフトボール投げに課題が見られるものの、全体としては都や全国の平均値より高い傾向にある。今年度は、コロナ禍で制限されていた運動の機会を増やし、児童の体力向上に努めてきた。来年度は、児童が発案する運動集会も始まるので、主体的に児童自らが自身の体力に課題をもち、それを克服しようとする態度を育成していく。
			成果目標	7B	体力テストで、都の平均値をほぼ達成できている。または、休み時間に外遊びをする児童が増えている。	2.6				
	生活習慣	SNSのトラブルが1件。児童に繰り返しSNSとのかかわり方について指導していく。児童はテレビやYouTubeの視聴時間、ゲームで遊ぶ時間が他校と比較して長いことがアンケート結果から分かった。安全で健全なメディアとの付き合い方を学校から家庭に継続して啓発していく。	取組目標	8A	健康的な生活習慣の確立を目指した指導を行う。SNS東京ノート等を活用するとともに、メディアとの付き合い方を意識させる。	2.8	3	B	教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	中学年児童によるスマートフォンの使い方及びSNSのトラブルが3件あった。児童に繰り返しSNSとのかかわり方について指導していく。また、引き続き今井小学校の児童はテレビやYouTubeの視聴時間、ゲームで遊ぶ時間が他校と比較して長いことがアンケートから分かっている。子供たちに持たせているゲーム機やスマートフォンに制限をかけていない家庭があることも改善が不十分であった。保護者会にてSNSやゲーム機への制限のかけ方等を伝えてきたが、これからも安全で健全な児童とメディアとの付き合い方を学校から家庭に継続して啓発していく。
			成果目標	8B	今井小SNSルールや家庭での約束を意識した生活ができている。デジタルメディア等を使用する時間を減らすことを意識している。	2.4				
地域・家庭の連携	学校広報	今井小学校ホームページの「校長ブログ」で、毎日学校の児童の様子を配信した。教職員からは、保護者にもっと自身の子供や学校教育に関心をもってほしいと願う声が多い。保護者会の内容を見直し、保護者の学校への関心を高めるように改善していく。	取組目標	9A	面談、HP、学校公開、保護者会等で児童の様子を積極的に伝える。	3.1	3.7	B	教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	今井小学校ホームページの「校長ブログ」で、学校の児童の様子を配信した。学校運営連絡評議会委員をはじめ、地域からも好評である。今年度は、保護者の在り方を教職員同士で情報交換し合い、多くの保護者に保護者会に参加していただけるよう努めてきた。教職員からは、保護者にもっと自身の子供や学校教育に関心をもってほしいと願う声が多い。学校教育に対する保護者の関心を高め、学校と保護者が一体となることで児童の健やかな成長につなげられるように改善していく。
			成果目標	9B	学校の情報が適切に伝わり、保護者が教育活動に関心を寄せ、学校と協働している。	2.7				
教師の働き方	児童時間	教職員の平均定時外勤務時間が30時間を下回り、成果が出ている教育計画をPDFで共有する等、ペーパーレス化を始めとする改革に努める。教職員からは、取組目標に対する肯定的な評価が100%、成果目標に対する肯定的な評価が94%であった。教師と子供たちがかわる時間と授業準備の時間を生み出すことができるようにする。	取組目標	10A	会議の効率化、ペーパーレス化、伝達事項のオンライン化を推進し、児童とかかわる時間と授業準備の時間を生み出すように努める。	3.1	3.5	B	教員の取り組みの記録 児童の行動観察、行動・学習の記録 児童アンケート、関係者アンケートの関連項目から(85)%以上の肯定的評価	昨年度と同じく、教職員の平均定時外勤務時間が30時間を下回り、働き方改革への取組に向けた成果が出ている。だが、昨年度は教職員の取組目標に対する肯定的な評価が100%、成果目標に対する肯定的な評価が94%であったことに対し、今年度はそれぞれ10%程度減少している。来年度は共に100%になることを目指し、ペーパーレス化の推進や会議時間の削減に努めることで、教師と子供たちがかわる時間と授業準備の時間を生み出すことができるようにする。
			成果目標	10B	児童の教師とかかわる時間が増え、共に活動したり、相談に乗ったりしている。	3				